



右 里岡 広章 さん
 中 里岡 姫奈 さん
 左 里岡 範子 さん

20 年前に撮影された一枚の家族写真。その写真に写る幼い娘に目を細めながら、里岡広章さんは 20 年の思い出と、これからを歩む娘への思いを語り出した――

「夜中に生まれてきたことを今でもよく覚えています。初めての子だったので、産声を聞いた瞬間は、感動とうれしさで涙があふれました。生まれた頃は本当に小さく、抱っこするだけでも私が緊張していました。仕事場である牛舎に一緒に行ったり、夜なかなか寝付かない日は、ドライブに出かけたこともありました。今振り返ると、どれも懐かしく、大切な思い出です。『自分が決めた道は、悔いなくやり切ってほしい』。」

そんな思いで、毎日、大切に育ててきました。もちろん、楽しい思い出ばかりではありません。中学生の時には、手術を受けるほどの大けがをし、涙を流す姿を見たこともあります。それでも、立ち上がり、前を向いて歩んでくれました。そんな経験をしながらも、元気に成長してくれたことが何よりもうれしい。気付けば、20 年はあっという間でした。これからも自分で選んだ道を信じて、悔いなく歩んでほしい。それが親として一番の願いです」

―新市誕生 20 周年特集― 受け継がれてきた思いを 未来につなぐ

写真の中で無邪気に笑う姫奈さんが誕生した平成 18 年、旧小林市と須木村が合併し、新しい小林市が誕生しました。

初めての子育てに戸惑いながら、小さな命を大切に育ててきた里岡さん夫婦。「どんな子に育っていくのだろう」。そんな期待を胸に、うれしい日も苦しい日も一緒に乗り越えながら歩んできた 20 年。姫奈さんは今年で 20 歳を迎え、心身ともに大きく成長しました。

小林市も今年で 20 歳になりました。私たち一人一人がこのまちとともに歩んできた 20 年。親から子へ、先輩から後輩へと、思いや誇りは受け継がれ、今に至ります。皆さんにとって、この 20 年ほどのような時間でしたか。忘れられない出来事や、多くの人との出会いなど、大切な時間だったのではないのでしょうか。

このまちをつくってきた私たちの思いを、未来の小林市につなぐため、多くの思いに触れていきます。

Kobayashi City 20th History

人とまちが一緒に歩んできた

小林市の 20 年を振り返る

須木村、野尻町との合併、新燃岳の噴火、地域の喜び、新しい施設や学校の誕生。この 20 年、小林市はさまざまな出来事を経験しながら、一步ずつ歩みを重ねてきました。まちの歴史を振り返ると、その一つ一つの出来事は、私たち一人一人の、それぞれの思い出とともにあります。



新燃岳の噴火では、多量の噴石が降り、車のガラスなどが割れる被害が続出。市内各地に、大きな被害をもたらした



野尻町との合併による記念式典の様子



旧小林市と須木村が合併して、新小林市が誕生。平成の大合併による新しい自治体としては、県内で 6 番目で最後の合併となった。3 月 20 日には、市役所本庁舎と須木庁舎で、開庁式を挙。新たにかけかえられた庁舎看板の除幕やテープカットが行われ、新市のスタートを祝った



小林駅 100 周年祭記念式典の様子



落成記念式典と記念イベントを市内各地で開催。式典では、市民など約 170 人が出席し、新庁舎の完成を祝った



農業開拓への第一歩となる浜ノ瀬ダム。水不足に悩まされていた地域に希望をもたらした



市の観光イメージキャラクターを募集し、全国から 243 件の応募。選考の結果、10 月 29 日に「こすも〜」が誕生した

旧野尻町と旧能都町の絆を引き継ぎ、小林市と石川県能登町が姉妹都市協定を締結。新たな交流の歴史が始まった



2067 人で人間空気椅子を達成し、世界記録を樹立。多くの人で新市誕生 10 周年を祝った



13 人のランナーが笑顔で聖火をつなぎ、小林のまちを駆け抜けた



4 大会連続の日本一の称号を獲得し、歓喜の笑顔を見せる生産者



竣工式では、地元の中学生らがテープカットで新体育館の誕生を祝福





小林地区交通安全協会
よしはる じゅり
吉春 寿里 さん

「ただいま」が聞こえる毎日を守るために

「いってきます」と家を出た人が、無事に「ただいま」と帰ってくる。その当たり前の日常を守りたい思いで、17年間活動してきました。これまで、未就学児から高齢者までを対象にした交通安全教室や通学路での街頭指導に取り組んできました。

入社当時に交通安全を教えていた小学生が、中学、高校へと進学し、今でも元気にあいさつしてくれる姿を見ると、活動が続けてきて良かったと感じます。大人になっても、交通安全教室で学んだことを思い出し、安全な行動につながってもらえたら、うれしいです。

私も入社当時は一番の若手でしたが、今では活動の中心を担う立場になりました。これからも街頭に立ち、子どもたちが毎日元気に学校へ行き、無事に帰れるよう見守り続けていきたいです。



爽やかな笑顔で高齢者に交通安全指導を行う勤務3年目の時の吉春さん



ガールスカウト宮崎第14団リーダー
おおでらおとし ずか
大平落 鈴香 さん

自立する心、地域を愛する心を育む

今年で団を発足して20年になります。小林市でも、自立した女性や地域を愛する女性を育てたいという思いで活動を始めました。その思いは、20年たった今でも変わることはありません。

設立当初は少人数でのスタートでしたが、徐々に活動の輪が広がり、多くの子どもたちの成長を支えてきました。活動が続ける中で大切にしてきたのは、子どもたちと一緒に楽しみながら活動することです。ガールスカウトは、学校だけでは学べない経験ができる場であり、子どもたちの居場所にもつながる大切な存在。ここでの経験を糧に、自信を持ち、大人になっても地域や社会で活躍する姿を見ることが何よりの喜びです。

これからも、変わらない思いで子どもたちに寄り添い、一人一人の成長を支えていきたいです。



精力的な活動は幅広く、ガールスカウト日本連盟キャンプ場でも活動



北きりしま田舎物語推進協議会
とみみつ てつお
富満 哲夫 さん

一期一会を大切に、まちの魅力を伝える

協議会の設立から20年間、農業体験や農家民泊の受け入れを続けてきました。市内や都市部の子どもたちに農業やまちの魅力を知ってもらいたいという思いで、多くの生徒を迎え入れています。

受け入れ農家は、設立当初に比べて減少し、高齢化も進んでいますが、子どもたちが食の大切さを学ぶ姿や再びこのまちを訪れる姿を見ることが、活動のやりがいになっています。農家民泊をきっかけに移住した人もおり、一度の体験が人生に影響を与えることもあります。だからこそ、一期一会を大切にしながら、農業やまちの魅力を伝え続けてきました。

この20年を振り返ると、多くの人との出会いが何よりの財産。これからも人と地域をつなぎながら、このまちの魅力を次の世代へ伝えていきたいと思います。



畑で説明をしながら、中学生に食の大切さを伝える富満さん



このまちを支えて――

「このまちを支えたい」。その思いを胸に、それぞれの場所で小林市を支えてきた人たちがいます。地域活動や仕事、日々の暮らしの中で積み重ねてきた確かな歩み。その一つ一つが、小林市の力となり、支えとなってきました。このまちを支えてきた人は、どんな思いで活動してきたのか。それぞれの歩みと胸にあるそれぞれの思いを紹介します。

子どもたちの心にスポーツの楽しさの種をまき続ける

子どもたちがスポーツを生涯好きでいてほしい。その思いでクラブ発足から22年間、小学生に陸上の指導を続けてきました。自分が生まれ育った地域の子どもたちの成長を支えてこれたことをうれしく思います。

指導では、子どもたちが自分のやりたい種目を中心に組み立てよう支えてきました。さまざまな種目に触れることで、スポーツの楽しさを知り、仲間を通じてコミュニケーション力も育っていくと感じています。この20年で、子どもたちへの指導の在り方は大きく変わりました。時代にあった指導ができるよう、コーチ陣と定期的話し合いながら、一人一人に寄り添う

指導を続けてきました。それでも、子どもたちの笑顔や成長を身近で見られる喜びはずっと変わりません。卒業した子どもたちが成長し、中学・高校で活躍していると聞かされた時に、大きな誇りを感じています。特に、かつての教え子が指導者としてこのクラブに戻ってきたことは、とてもうれしいことでした。現在は、教え子3人がコーチとして活動しており、地域で育った子が、今度は地域の子どもたちを育てる立場に。その姿を見ることが、何よりの励みになっています。

これからも、子どもたちが生涯、スポーツを好きでいてくれるよう、その第一歩を支えていきたいです。



細野コスモスジュニア 総監督
さかもと ひろやす
坂元 宏康 さん



思いを受け継ぎ、 歩み続ける――

市内を見渡せば、農業やものづくり、そして日々の暮らしの中で、受け継がれてきた技術や信念を胸に、それぞれの道を歩み続けてきた人たちがいます。自分のために、誰かのために、そして未来の小林市のために。今日もこのまちで情熱を燃やし続ける人たちは、何を思い、何を未来につないでいくのか。その歩みと思いに迫ります。

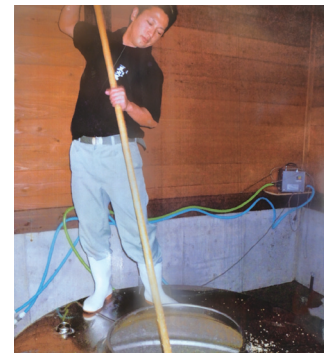
110 年以上の伝統を 未来の一杯につなぐ――



酒のキング
有限会社 角畑酒販 店長
かくはた かずひろ
角畑 一弘 さん (67)



すき酒造株式会社 杜氏
うちじま みつお
内嶋 光雄 さん (67)



伝統の焼酎造りに励む入社 1 年目の時の一仁さん



すき酒造株式会社 副杜氏
うちじま かずひと
内嶋 一仁 さん (38)

応援し続けた地元の焼酎

須木村との合併前から須木焼酎を店に置いていましたが、当時の売れ行きはあまり良くありませんでした。それでも、地元の焼酎だからこそ広まってほしいという思いで、ずっと応援してきました。

内嶋親子が焼酎造りを始めてからも、すぐに売れ出したわけではありません。2 人が常に上を目指し、造り続けてきたからこそ、少しずつ評判が広がり、多くの方々に選ばれるようになったのだと思います。今では、遠方から買い求めて来るお客さんもいますし、初めてのお客さんにも自信をもってお勧めしています。お客さんからも「おいしい」という声をよく聞くようになりました。昔から応援してきた地元の焼酎がここまで成長したことを、本当にうれしく思います。これからもすき酒造らしいこだわりを大切にしながら、地元はもちろん全国でも愛される焼酎であってほしいと思います。

親子でつないだ焼酎造り

19 歳の時に焼酎の世界に入り、若い頃は、県内の焼酎蔵で蔵子として修業を重ね、先人たちから受け継がれてきた焼酎造りの技術を学んできました。

そして、平成 18 年にすき酒造へ入りました。当時は、名も売れていない会社でしたので、まさにゼロからのスタート。しかし、振り返れば長い年月をかけながらも、親子二人三脚で歩み続け、全国でも須木焼酎を知ってもらえるようになりました。息子も頼もしく成長し、一緒に焼酎造りができることを何よりうれしく思います。

しかし、今の評価に満足してはいけません。常に上を目指し続けることが大切です。だからこそ、この技術を私たちの代で終わらせてはいけません。次の世代にその技術をつなぎながら、新しい挑戦を重ね、これから先も長く続くすき酒造であり続けることを期待しています。

地元に愛される焼酎を目指して
入社当時は、焼酎造りの知識も経験ありませんでしたが、古くから受け継がれてきた技術を持つ父の背中を追い、一つ一つ技術を学び続けてきました。時には、厳しい指導を受けることもありましたが、今では、その一つ一つが技術を身に付けるために必要

なことだったと思います。当時の須木焼酎は、地元でもまだ広く知られておらず「おいしくない」と言われ、悔しい思いを何度もしてきました。だからこそ「まずは、地元の人に飲んでもらいたい」という思いが強くなりました。その思いを胸に、親子で品質向上に力を注いできました。手間を惜しまず、一滴一滴にこだわる。そうして積み重ねてきた努力が評価され、品評会で賞を受賞した時は本当にうれしかったです。今でもあの時の喜びは、忘れられません。その後、二人でがむしやりに走り続けてきました。今では北海道から沖縄まで多くの方から注文をいただくようになりました。その味を支えているのが、創業当時からの 110 年以上受け継がれる甕仕込みと、徹底した衛生管理。伝統とともに、須木焼酎の味を守っています。

伝統を守り新たな挑戦
伝統を守りながらも、新たな挑戦を続けています。今年発売した夏焼酎は、親しみやすい味わいとデザインを採用しました。焼酎を飲む人が減っている今だからこそ、多くの人に手に取ってもらえる焼酎を造り、須木焼酎の魅力を知ってもらいたいと思います。
未来へつなぐ須木焼酎
ここまで成長できたのは、多くの人に支えていただいたからこそ。その感謝を忘れず、今後も地域に愛される唯一無二の焼酎造りに挑戦し続けていきます。何より、この技術を絶やしたくありません。父から受け継いだ技を、次の世代に伝えていきたい。20 年後も、この須木の地で焼酎造りが受け継がれ、須木焼酎が小林市の特産品として愛され続けるよう、これからも技を磨き続けていきます。